

「神のために豊かになる」

ルカによる福音書 12 章 13～33 節

東京神学大学神学生 堺 正貴

「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」

群衆の中から、そう叫び声をあげた人がいます。おそらく群衆の中の誰もが、何らかの不満を抱えていました。その意味で、この人は群衆の声を代表していたともいえるでしょう。

自分だって分け前に与っていいはずなのに、ないがしろにされている。おかしいではないか。そういう不満は世に満ち溢れています。その不満が正当なものなのか不当なものなのかいろいろ議論はあるでしょう。しかし、イエス様は、法にも、世間にも忖度することなく、まっすぐにこの人の心に、いや群衆の心の中に入ってゆき、すべての人々に向かってこういいました。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

イエス様は、この人の主張を貪欲と見なしたのです。人々の内に巢食っている、欲張ってあくことを知らない心を見たのです。しかし、もっと欲しくて何が悪い。そう開き直る人もいるかもしれません。昔も今も人間の本音とはそんなものだ、そう考える人は案外多いのかもしれませんが。つまり、人間の本音を生物的な欲望だけでとらえて、それをつつみ隠さず暴露するならば、人間の真実に迫ることができる。そう思い込んでいるのです。それが現実じゃないか、現実を見ろ！そういう主張の人々がリアリストとしてもはやされることもあります。

けれども、イエス様は、もっと欲しいというむきだしの欲望が、まことの人間を作り上げているとは思いませんでした。むしろ人間のまことの命をおびやかすものだ、と見たのです。人間は誰でも死にます。しかし、生物的な死よりも人間の命を損なうものがある。それは、自分のためだけにすべてを所有し満足しようとする心です。そのことを教えようとしてイエス様はたとえ話をなさいました。

そのお話では、「作物をしまっておく場所がない」ほど、豊作だったお金持ちは、貧しい者たちに何も分け与えようとはしませんでした。その豊作によって新しい夢を見るのです。最近の聖書協会共同訳で引用します。その方が原文に忠実なものですから。「こうしよう。倉を壊し、もっと大きいのを建て、そこに穀物や蓄えを全部しまい込んで、自分の魂にこう言ってやるのだ。『魂よ、この先何年もの蓄えができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。』」。自分の魂に向かって、魂よと呼びかけている。魂よ、「さあ、安心して食べて飲んで楽しめ」。

イエス様は、そんな程度のことを魂のよりどころにしたら、むしろ自分の魂を殺してしまうのだ、と言っているのです。それはまた他者をも殺すことに繋がっていきます。かっこの例として最近侵略戦争を始めたプーチン氏が挙げられるでしょう。あの土地はそもそも我々が権利を持っているのだ、ロシア系住民の権利を守るためだ、そんなふうと言って平気で武力で土地を奪おうとする。平気で殺人をする。

そして嘘ばかりつく。たくさんプロパガンダを流す。外から見ると嘘とわかっているから、その身振りは実に滑稽です。そしてそこまで厚かましくなれる人間にぞっとさせられます。プーチン氏は自分が自由に使える権力、支配力を実感できればできるほど楽しい。欧米諸国などの鼻を明かしてウクライナを占領できれば、そのためにどれだけの人々が犠牲になろうとも、どれだけ大きな廃墟を作ろうとも、こう言うことでしょう。「さあ、安心して食べて飲んで楽しめ」。

しかし、これは決して他人事ではありません。自分たちこそが正しいのだ。自分の民族は優秀なのだ。そう確信したい。そうやって自分たちだけの内輪で「安心して食べて飲んで楽しめ」むために、日本でも歴史の中の都合な事実を抹消しようとして懸命に励んでいる人たちがいます。南京大虐殺はなかったのだ。関東大震災で、当時日本にいた韓国人の人たちが殺戮されたことなどなかったのだ。どれだけ証拠があっても、日本が悪いことをしたというのは外国から流されたプロパガンダである、そう信じ込ませようとして、プロパガンダをしている人々がいます。そういう人々が唱える「歴史戦」の本当の姿が、今、プーチン氏によってカリカチュアされて暴露されているように思えます。こうした洗脳から逃れるためには逆の主張をしている専門的な歴史研究の本や様々な証言を虚心坦懐に読むといいでしょう。

自分たちは立派だ、立派だと主張するまさにそのところで、私たちは最も深い罪を犯している。自分や、自分の仲間のプライドを守り、それが守られることに「さあ、安心して食べて飲んで楽しめ」と言いたいために、嘘をつく。被害者を踏みつけにしようが、貧しいものから奪おうが、何が悪いか！皆やっている！と開き直るようになる。自分を高めるために他人を卑しめるようになるのです。その結果自分のまことの命を損ない卑しめることになるのです。

イエス様は神様のために豊かになることこそ、ほんとうに生きることになるとおっしゃいます。もう少し先を読んでいきますと分かりますが、それは神の国を求めるとい生き方です。当時、忌避されていた黒い鳥カラスも、名もない花も神さまの愛によって生かされている。そのことが分かれば、人間的に見た評価など意味がないことが分かります。私たちの評価では、惨めにしか映らないような世界の片隅にも神様の愛が貫かれている。私たちは、その愛によって解放されその愛によって支えられその愛に向かって生きていけばよい。その時にもはや自分を守るためにとりつくろう必要はなくなり、他者に向かって心は開かれていくのです。

神様から見れば人間は罪びとです。ですから自分や祖先やまたは何らかの人間を崇めるのは、罪びとを祭り上げる偶像崇拜に過ぎないのです。

ここで一言断っておきます。この罪びとであるということは、本来あるべき人間の高い姿によって明らかにされるのです。イエス様は人間を実に高く評価しておられるのです。だからこそ、貪欲にとらわれた人間は本当の命を損なっているというのです。その命は、自分ではなく神様の愛に誇りを持つことで養われます。その愛はイエス様の十字架の姿に現れています。すべての人々を神様の愛によって生かすために、すべての人々に自分を明け渡してすさまじい苦しみと惨めさの中で殺されたイエス様の姿に現れています。この世からは最もさげすまれる姿です。そこに神の国の栄光が顕れたのです。つまり、キリスト者の平和とは、イエス様の愛に生きられれば、この世のことは何も恐れる必要がないということに尽きます。そのような愛に生きることなどとうていできないとしり込みする人もいることでしょう。

しかし、イエス様の十字架と復活によって現わされた神さまの愛を信頼できるならば、すべては変えられます。私たち人間が自分の力ではできなかったことを成し遂げられた神様の愛と力を信頼の中で、神の国を祈り求めることができるようになります。その祈りの中で、神様に向き直る回心が繰り返されます。日々の回心の歩みの中で、御心が天になるごとく地にもなるようにと、主イエスの証人として、主イエスの愛がこの地に実るように生きる者とさせられます。それが神の民の一人、キリストを主と告白する信仰者になることなのです。全世界の主であるイエス・キリストを頭とする教会に招かれたゆえに、世界に責任を持った共同体の一員として神様に用いられる新しい生き方が与えられます。自分の属するキリスト教会全体が、神の御心になんて、世界に平和を確立する地の塩となるように、そのために生きるよう礼拝を通して励まされ、自分を献げるようにさせられます。神様の愛によってあふれるほど豊かにさせられて、神様にすべてを注ぎ返す豊かさに生きるのです。どうか皆さん、教会に来てください。礼拝の中で御言葉に聞き、神の国に仕える道に目が開かれてほしいのです。神様の平和の使者になる道を新しく歩んでほしいのです。祈ります。

神様からすべてを与えられているのに、不満の中で、他人をねたみ他人と争い自分を持ち上げようとする私どもの罪をお赦してください。どうか神様が豊かに注いでくださる愛に満たされて、その愛を隣人に分け与えることのできる者として私どもを新しく生かしてくださいますように。人々を分裂させる敵意を引き取られた十字架の主イエス・キリストを通して世界を平和に導く神様にすべての栄光を帰すことで、私どもがこの地に平和をもたらすことができる者とされますように支え導いてください。この祈りを主イエス・キリストの御名を通してみ前にお捧げいたします。アーメン

2022年10月4日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖書が語る平和」